

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01032

研究課題名（和文）近世中国の刑罰制度に関する総合的研究 軍制との関係を中心として

研究課題名（英文）A Study of punishment in early modern China

研究代表者

徳永 洋介（Tokunaga, Yosuke）

富山大学・学術研究部人文科学系・教授

研究者番号：10293276

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：今回の研究では、宋代以降の刑罰制度において、死刑に次ぐ重刑が犯罪者を軍隊に編入して服役させるかたちをとったのは、当事者を強制移住させてその社会的隔離をはかるとともに、戸籍上も民籍から兵籍へと変えることで兵役という無期の強制労働を科すためであったことを論証した。したがって、これより罪の軽い者については、強制移住には処するものの、無期の強制労働を科すか、純粋な社会的隔離で済ませる手法がとられたのである。

また、『慶元条法事類』の訳注作業を通じて、今回の研究成果を明らかにするとともに、内外の研究者がこの史料を十分に活用できるようにはかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)宋代以降の刑罰制度に一貫した特徴と各時代に特有の現象を浮き彫りにすることによって、近世中国の法秩序と社会編成との関係の解明に資する。

(2)宋代の法と刑罰、そして司法制度に関して、今後の学問的基準となる概論を提示するとともに、近世中国の法制に関する主要なテキストの分析・校訂、さらに基本語彙の収集・整理を通じて、新たな史料学の構築と内外の研究者が利用可能な環境づくりに貢献できる。

研究成果の概要（英文）：This study demonstrates that, in the penal system from the Song period onwards, the second most severe punishment after the death penalty took the form of enlisting criminals in the army for labour service in order to both socially isolate them and change their household registration to registration with the armed forces, thereby imposing forced labour on them for life. In other words, so long as the punishment for criminals was limited to forced labour for a definite term, they could be subject to forced relocation but not to a change in their household registration. In addition, the results of this research were made public through an annotated translation of the Qingyuan tiaofa shilei 慶元条法事類 (Classified laws of the Qingyuan era), and efforts were also made to enable researchers both in Japan and abroad to fully utilize the relevant historical sources.

研究分野：中国近世史

キーワード：配軍 編管 羈管 充軍 律 例 勅令格式 慶元条法事類

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、宋代以降の刑罰制度について、死刑に次ぐ重刑の構造と特徴を軍制との関係から解明することにあるが、これまでの研究では、宋代に関して少数ながら見るべき成果があるだけで、これを元から明を経て清に一貫した事柄としてとらえ分析を試みようとする取り組みはほとんどなかった。これにはいくつかの背景があるが、具体的には以下の諸点が深く関わっている。

(1) 「唐律」が死刑の次に流刑を設け、追放刑(強制移住)を死刑に次ぐ重刑としたことは、死刑と労役刑(強制労働)を基本とする従来の刑罰制度に大きな画期をもたらすものであった。ところが、律の流刑はやがて律外の刑罰の配流に主要な機能を奪われ、宋代になると、犯罪者を雑役部隊に編入して服役させる配軍(刺配)が配流にかわり死刑に次ぐ重刑となった。同時に律の流刑は杖打刑と有期の労役刑に読み替えて執行されたため、律の流刑にかわる強制移住という側面に加え、無期の労役刑としての役割を担うこととなった。しかし、従来の研究では、宋代に無期の労役を科すにはなぜ軍隊に収容するかたちを取らねばならなかったのか、そしてこの配軍が編管・羈管・移郷などの労役を伴わない強制移住とどのような関係にあったのかなどの問題については、ほとんど問われることがなかった。

(2) 上記の配軍は金代にいちど衰えるが、明は「明律」で流刑を再び死刑に次ぐ重刑と定める一方で、元代の出軍(流遠)に由来する充軍を流刑に準ずる追放刑として律に明記された。その後、「明律」の流刑は追放刑の実質を失うかわり、犯罪者を軍隊に編入して遠隔地に移送する充軍は、律外の刑罰として発展を続け、清代の發遣へと受け継がれた。ただし、この元の出軍から明の充軍にいたる刑罰制度の流れについては、元の出軍を論じた徳永の業績や明代の充軍に取り組んだ呉艶紅の著作のほかには、まとまった業績はほとんどなく、配軍と元代以降の出軍・充軍・發遣との関係はまったく不明のままであった。

(3) 宋の配軍と明の充軍は多くの点で酷似しており、後者は一見すると前者の焼き直しにも思えるが、後者は明代後期には衰えを見せ、やがて刑罰を銀であがなうしくみが普及するのにもとない、元から継承した極端な辺境へ移送する發遣のみが残った。とすれば、こうした変容は如何なる理由が原因で生じたものなのか、いちどは衰えた配軍が明代に充軍として再編されるにあたり、これもまた律外の刑罰として展開しなくてはならなかったのはなぜなのか、この点もまったく解明が進んでいない。これらの研究が俟たれるゆえんである。

2. 研究の目的

本研究では、近世中国の刑罰制度の構造と特徴の解明、とくに死刑に次ぐ重刑として犯罪者を軍隊に収容して執行する処罰のしくみとその歴史的意義の解明に取り組む。具体的には、(1)近世中国の刑罰制度に関する総合的研究、(2)広義の刑罰制度からみた近世中国の軍制の位置づけ、(3)近世法制用語の基礎的研究、(4)法制史料デジタルアーカイブズの構築とデジタル・ヒューマンティーズの方法論を活用したテキスト研究の実現に取り組む。

(1) 宋の配軍や明の充軍、あるいは清の發遣など、近世中国の死刑に次ぐ重刑については、程度の差こそあれ、断代的な個別研究はこれまでもされてきた。これに対して、本研究は、これらの個別研究を一つの体系的な研究として統合・発展させ、宋代以降の死刑に次ぐ重刑の変遷を総合的な視点でとらえることで、近世中国の刑罰制度に通底する特徴と各時代に特有の現象を浮き彫りにすることをめざす。

(2) 宋代以降の軍隊組織は、兵農分離の方向をたどる一方で、刑罰の執行機関としても重要な役割を果たした。しかし、近世中国の軍制にはなぜこうした特徴が現れたのか、これまでの研究ではその意味が正面から問われることはなかった。そうした反省をふまえ、本研究では、宋の配軍から明の充軍へのあゆみを通して、近世中国の軍隊を広義の刑事制度のなかに位置づけ、国家の社会編成と秩序維持に関わる新たな視座づくりをめざす。

(3) 近世中国の法制については、宋代や清代に関する研究蓄積が比較的豊富なのに比べ、元代や明代の研究はいまだ十分でなく、これらの時代を一貫してとらえるうえでも少なからず支障を来している。そこで本研究では、宋代から明代に至る時代の法制用語の整理・分析を行い、語彙解を作成するとともに、法制史料に関する書誌情報をまとめ、研究環境の整備をめざす。

(4) 科研費・基盤研究(C)の研究成果の一環として作成した『皇明条法事類纂』のデジタルアーカイブスを用いた史料分析を行うとともに、当該の電子資料システムを伝統的な文献歴史学の手法を応用した校訂作業や史料批判をできるかたちに更新する。

3. 研究の方法

本研究での役割分担としては、徳永(研究代表者)が宋元時代の刑罰制度を起点として作業全体に携わるほか、中村正人(研究分担者)は基本法規の律と清の刑罰制度との関係から、また高橋亨(研究協力者)は明代制度史の立場から、それぞれ事実関係の検証と分析を重点的に進めた。

さらにデジタル史料の活用とデジタルアーカイブズの構築と運用に関しては、中村覚（研究分担者）と矢野（研究協力者）が策定にあたった。

(1) 近世中国の刑罰制度の構造と特徴の解明：

本研究では、まず南宋時代の基本法規を整理分類した『慶元条法事類』と明代前半期の条例を集成した『皇明条法事類纂』の会読を定期的に行い、その詳細な分析を中核に据えて作業を進めた。両者は近世中国の刑事司法のみならず、当時の行政のあり方を知るうえで格好の基本史料であるにもかかわらず、従来は個々の関心にもとづいて部分的に利用されるだけで、それぞれの全体像をふまえながら踏み込んだ解析をしたものはほとんどなかった。この点で前者には、配軍をはじめ、編管・羈管・移郷など、宋代の強制移住をともなう各種の刑罰に関する貴重な史料が豊富に含まれており、同じ宋代の各種文献史料との徹底した対校作業を通して、当該の刑罰制度の実態とその性格を浮き彫りにするとともに、同時代の軍制史料との比較・分析を進めた。

他方、『皇明条法事類纂』も本研究が主要な課題とする明の充軍に関する豊富な史料を掲載しているが、何分にもこれまで本格的に読まれることがほとんどなかった史料であるため、定期的な会読作業を基本に据えて、法制史料としての構造と特徴を明らかにすることに努めた。ただし、明代の充軍については、研究上の空白が多く、最も基本となる史料の調査も十分に行われているとは言いがたい。こうした観点から、本研究では『明実録』に見える関連記事に着目し、『明史』刑法志を基本に据えながら、法制史料の調査・収集と整理作業に着手した。ただし、『明実録』はなにぶんにも大部な史料であり、折からのコロナ禍の影響もあって、本研究の作業自体に随所で遅れが生じたため、充軍に関しては、あくまで基本史料の収集・整理にとどめ、『慶元条法事類』の分析と宋代の刑罰制度に集中して研究作業を進めた。

(2) 法制用語の整理・分析と関連資料のデジタル化：

法制史料に関する書誌情報をまとめる一方で、上記の研究作業で得られた成果をもとに、法制用語の整理・分析を行い、語彙解の作成を進めるとともに、研究課題の絞りこみに改めて取り組んだ。このうち宋元時代の法制については、すでに豊富な研究蓄積があるものの、いまだ未解決の部分も少なくなく、作業は必ずしも容易とは言えないが、『慶元条法事類』の精読作業とその成果は、この点で有力な梃子と断じてよい。他面、明代の法制用語については、この分野自体の研究蓄積が少なく、史料分析にも多大の支障を来していることから、すでに触れた『明実録』の整理作業を軸にその基盤づくりを進めた。これらは本研究で行う史料解析と並行して行われるものであり、自他ともに利用可能な研究環境の構築をめざすものであり、各種のデジタル史料をフルに活用して作業内容の充実をはかるとともに、研究成果のデータベース化をめざして作業を進めた。

(3) 既存電子史料システムの改良と更新：

研究代表者の徳永は科研費・基盤研究(C)（2015～2017年度）の研究成果の一環として、東京大学総合図書館が所蔵する『皇明条法事類纂』全編の写真版と詳細な目録を同図書館のwebサイトにデジタルアーカイブスとして公開することができた。しかし、これは電子化されたテキスト・データとしてはいまだ初歩的なもので、紙媒体の原史料と同じようには技術的な面で課題を残している。そこで本研究では、(1)で掲げた『皇明条法事類纂』の分析と並行して、徳永と中村覚が中心となり、当該の電子史料システムを伝統的な文献歴史学の手法を応用した校訂作業や史料批判ができるかたちに更新できるよう作業を進めた。

4. 研究成果

(1) 配軍・出軍（流遠）・充軍など、宋代以降の刑罰制度において、死刑に次ぐ重刑の多くが犯罪者を軍隊に編入して服役させる手法をとったのは、主として以下の二点を目的としていたことを明らかにした。第一は、罪人の戸籍を民籍から兵籍（軍籍）に移すことで、軍役負担というかたちで無期の強制労働（労役刑）を科すことであり、第二は、罪人を現住地から軍営へと移送することで、その社会的隔離をはかることであった。このため処罰の軽重は移送先の軍営の種別、そして移送先の遠近によって差等がつけられたが、この種の刑罰がとくに宋代以降に重要性を増したのは、兵農分離が進み、兵士が妻子ともども兵籍に登録され、一般の編戸編民と区別されたためであった。なお、宋代の配軍で受刑者に刺字（入れ墨）を施したのは、こうした戸籍の移管を明示したものであり、元代の出軍や明代の充軍で刺字が姿を消した背景には、戸籍制度のみならず、兵制の変化が大きく関わっていたものと判断される。ただし、本研究ではその蓋然性を指摘するにとどめた。

(2) 宋代には受刑者を軍隊に収容して服役させる配軍のほかにも、編管・羈管など、律の五刑つまり主刑（正刑）とは別に強制移住をともなう刑罰が現れた。これらは編配と総称され、罪の軽重に応じて移送先の遠近で差等を設けるなど、律の流刑（正刑のうち、死刑に次ぐ重刑）とあい似た形式を有していた。しかし、流刑がもともと強制移住と有期の強制労働から構成されていたのに対して、配軍は無期の強制労働を科す点で本質的に異なるだけでなく、編管・羈管では民籍を維持したまま配所に移送することに主眼が置かれ、もとより強制労働とも無縁であった。とくに編管は現住地から離れた土地に移送すること自体に意味があったのにくらべ、羈管は一種の軟禁状態をともなうなど、いわば社会的隔離の手法の違いが重要であり、移送先の遠近は犯罪者処罰としては二次的なものでしかなかったことも本研究で判明した。なお、殺人犯でありながら死刑を赦された者については、編管に処すかわり、移郷が適用され、現住地から千里外へと移送さ

れたことも改めて明らかになった。

(3) 明代の充軍については、最初は軍戸を強制移住させる刑罰でしかなかったが、やがて民戸を軍戸に編成替えすること自体が犯罪者処罰と観念されるようになったことを明らかにした。また宋代の配軍刑が罪人を兵籍に移管して一般民戸と区別はするものの、それはあくまで本人限りのことであり、明代の充軍のように、処罰の影響がその子孫にまで及ぶことがなかっただけでなく、この点では元代の出軍と共通する部分がむしろ多かったことを指摘した。

(4) 『『慶元条法事類』刑獄門訳注稿』(2024年刊)を編集・執筆し、本研究の成果をとりまとめて公開するとともに、「南宋時代の法と裁判 『清明集』を読むために」(『訳註『名公書判清明集』懲悪門』汲古書院、2024年刊に所収)を執筆し、南宋時代の法と刑罰、そして司法制度について、最新の知見をふまえた概説を公表した。

(5) 宋代以降の法と刑罰のあり方と密接に関わる官僚制の問題について、「宋代官僚制の成立 元豊官制の歴史的意義」(『岩波講座世界歴史』第7巻「東アジアの展開 8-14世紀」岩波書店、2022年刊)を執筆し、北宋後期の元豊官制が中国専制体制のあゆみにおいて大きな転機になったことを明らかにした。

(6) 2019年11月に富山大学人文学部にて、本科研費メンバーに加え、平成28年度科研費・基盤研究(B)「情報時代における中国学研究・教育オープンプラットフォームの構築」(研究代表者：二階堂善弘)および富山大学附属図書館の共催というかたちで、「情報化時代の東洋学 デジタルアーカイブズの現状と課題」と題する共同シンポジウムを開催し、この科研費のもう一つのテーマであるデジタルヒューマニティーズの手法を生かした東洋学研究の今後について活発な議論を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計36件（うち査読付論文 15件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 中村正人、唐律疏議講読会	4. 巻 66 (2)
2. 論文標題 『唐律疏議』鬪訟律現代語訳稿（5） 第39条から第42条まで	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 金沢法学	6. 最初と最後の頁 238-249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中村覚、高嶋朋子	4. 巻 2024
2. 論文標題 静的サイトジェネレータを用いたデジタルアーカイブシステムの構築：『Digital Cultural Heritage』への適用	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京大学大学院情報学環社会情報研究資料センターニュース	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中村 覚、黒嶋敏、畑山周平、山田太造	4. 巻 2023
2. 論文標題 IIFを用いた前近代絵図の比較支援ツールの開発	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 じんもんこん2023論文集	6. 最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中村覚	4. 巻 2023
2. 論文標題 日本語史料を対象としたテキストエンコーディングの事例紹介	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋史研究	6. 最初と最後の頁 89-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 中村寛、金甫榮、南山泰之	4. 巻 77
2. 論文標題 Archivematicaを活用したデジタルデータの長期保存を支援する簡易操作アプリケーションの開発	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 107-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24506/jsda.7.s2_s107	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoru Nakamura, Guanwei Liu, Hajime Miyazaki, Satoshi Inoue, Wataru Ohyama, Taizo Yamada	4. 巻 2023
2. 論文標題 Implementation of data-driven historical informatics research on Kao (Stylized Signature).	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Digital Humanities	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5281/zenodo.8107647	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 徳永洋介	4. 巻 7
2. 論文標題 宋代官僚制の形成 元豊官制の歴史的意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩波講座世界歴史07 東アジアの展開	6. 最初と最後の頁 201-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村正人	4. 巻 65-1
2. 論文標題 「『唐律疏議』 鬪訟律現代語訳稿(4) 第31条から第38条まで 」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢法学	6. 最初と最後の頁 199-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚	4. 巻 32
2. 論文標題 TEIデータに対する可視化・分析ツールの開発	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 情報知識学会誌	6. 最初と最後の頁 389-392
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川潤、 大向一輝、 中村覚、 北本朝展	4. 巻 32
2. 論文標題 知識グラフを用いた歴史資料の構造化：TEIとRDFの活用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 情報知識学会誌	6. 最初と最後の頁 428-431
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、 劉冠偉、 山田太造	4. 巻 2022-CH-130
2. 論文標題 NDLOCRを用いた東京大学史料編纂所史料集版面画像に対する検索システムの開発	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 研究報告人文科学とコンピュータ (CH)	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、 劉冠偉、 山田太造	4. 巻 2022
2. 論文標題 研究資源としてのWEB APIの利用：歴史資料・古典籍の字形を横断的に検索するアプリケーションの開発	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 じんもんこん2022論文集	6. 最初と最後の頁 88-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Boyoung Kim, Satoru Nakamura, Hidenori Watanave	4. 巻 2022
2. 論文標題 Using Archivematica and Omeka S for Long-Term Preservation and Access of Digitized Archive Materials	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 From Born-Physical to Born-Virtual: Augmenting Intelligence in Digital Libraries	6. 最初と最後の頁 241-250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金甫榮、中村覚、渡邊英徳	4. 巻 6
2. 論文標題 [B2] 真正なデジタル化資料の長期保存と公開: ArchivematicaとOmeka Sを用いた事例	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 s147-s150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村正人	4. 巻 64-1
2. 論文標題 「『唐律疏議』闕訟律現代語訳稿 (3) 第21条から第30条まで」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢法学	6. 最初と最後の頁 165-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、劉冠偉、山田太造	4. 巻 2022-CH-128(8)
2. 論文標題 部品と画数で漢字を検索するためのUnicode入力支援ツール	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 研究報告人文科学とコンピュータ (CH)	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、鳥居克哉、山田太造、稗方和夫	4. 巻 2022-CH-128(8)
2. 論文標題 日本中世古記録を対象としたトピック抽出自動化システムの構築	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 研究報告人文科学とコンピュータ(CH)	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、小風尚樹、永崎研宣、渡辺 美紗子、戸村美月、小風綾乃、清武雄二、後藤真、久慈司	4. 巻 2021
2. 論文標題 相互運用性を高めた日本歴史資料データ実装:『延喜式』TEI と IIIF を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 じんもんこん2021論文集	6. 最初と最後の頁 294-301
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、須田牧子、黒嶋敏、井上聡、山田太造	4. 巻 2021
2. 論文標題 データ駆動型歴史情報研究基盤の構築に向けた知識ベースの構築とその活用: 絵図史料を対象として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 じんもんこん2021論文集	6. 最初と最後の頁 88-95
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、山田太造、渋谷綾子、大向一輝、井上聡	4. 巻 2021
2. 論文標題 日本史史料を対象とした研究データ基盤整備における課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 じんもんこん2021論文集	6. 最初と最後の頁 80-87
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoru Nakamura, Ayano Kokaze, Yoshiho Iida, Naoki Kokaze, Tatsuo Hemmi	4. 巻 11
2. 論文標題 Development of a support system for extracting mentioned bibliographical data from the Encyclopdie entries	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The 11th International Conference of Japanese Association for Digital Humanities	6. 最初と最後の頁 130-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村正人・唐律疏議講読会	4. 巻 63-1
2. 論文標題 『唐律疏議』鬪訟律現代語訳稿(2) 第11条から第20条まで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金沢法学	6. 最初と最後の頁 175-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、永井正勝、和氣愛仁、高橋洋成	4. 巻 2020-CH-125(3)
2. 論文標題 ヒエラティックとヒエログリフの対応関係の再検討に基づくHieratische Palographie DBの更新	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 研究報告人文科学とコンピュータ(CH)	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24506/jsda.5.1_56	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、高嶋朋子	4. 巻 5(1)
2. 論文標題 持続性と利活用性を考慮したデジタルアーカイブ構築手法の提案	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 じんもんこん2020論文集	6. 最初と最後の頁 55-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、小川潤、長崎研宣、大向一輝	4. 巻 2020
2. 論文標題 時間的文脈情報を含む社会ネットワーク記述のためのデータモデル設計と一次史料を用いたデータ構築の 実践：カエサル『内乱記』を事例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 じんもんこん2020論文集	6. 最初と最後の頁 215-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、金甫榮、小風尚樹、橋本雄太、井上さやか、茂原暢、永崎研宣	4. 巻 2020
2. 論文標題 TEIを用いた『渋沢栄一伝記資料』テキストデータの再構築	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 じんもんこん2020論文集	6. 最初と最後の頁 47-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、永井 勝、和氣愛仁、高橋洋成	4. 巻 2020
2. 論文標題 Hieratische Palaeographie DBの構築	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 じんもんこん2020論文集	6. 最初と最後の頁 191-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、成田健太郎、水野遊大	4. 巻 (30)
2. 論文標題 法帖画像アーカイブを研究資源として活用するために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 書学書道史研究(書学書道史学会)	6. 最初と最後の頁 71-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚	4. 巻 4(4)
2. 論文標題 Cultural Japanの構築におけるジャパンサーチ利活用スキーマの活用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 348-351
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11166/shogakushodoshi.2020.71	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、田村隆、永崎研宣	4. 巻 2020-CH-124(2)
2. 論文標題 源氏物語本文研究支援システム「デジタル源氏物語」の開発におけるIIIF・TEIの活用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究報告人文科学とコンピュータ (CH)	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、岡崎敦、藤川隆男、佐治奈通子、田野崎アンドレア嵐、濱野未来、大邑潤三	4. 巻 '(34)
2. 論文標題 特集 デジタル・ヒストリーの諸実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 クリオ = Clio : a journal of European studiesu	6. 最初と最後の頁 117-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、高橋大成	4. 巻 2020-CH-123(1)
2. 論文標題 貼り込み形式の資料に対するフォント画像を用いたテキスト検索手法の検討 - 東京大学総合図書館所蔵『君拾帖』を対象として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究報告人文科学とコンピュータ (CH)	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、水野遊大、稗方和夫、成田健太郎	4. 巻 SIG-KST-039-02
2. 論文標題 デジタル文化資料活用システムの設計手法 法帖研究支援の事例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人工知能学会研究会資料	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、佐治奈通子、永崎研宣	4. 巻 2019
2. 論文標題 TEI とIIIF をベースとしたオン/オフライン併合型史料研究支援システムの開発 - オスマン・トルコ語文書群を対象として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 じんもんこん2019論文集	6. 最初と最後の頁 293-300
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、小風尚樹、永崎研宣	4. 巻 2019
2. 論文標題 構造化記述された財務記録史料データの分析手法の開発：イギリスの船舶解体業を事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 じんもんこん2019論文集	6. 最初と最後の頁 183-190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村覚、佐治奈通子	4. 巻 2019-CH-120(11)
2. 論文標題 歴史学と情報学のより良い協働を目指して オープンなDH支援ツールを用いたボスニアのカトリック修道院所蔵のオスマン・トルコ語文書群のデータ整理の一事例	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究報告人文科学とコンピュータ (CH)	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 中村覚、鳥居克哉、山田太造、稗方和夫
2. 発表標題 日本史学者の要求分析に基づく歴史資料のトピック推定システムの開発
3. 学会等名 情報処理学会 第83回全国大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nakamura Satoru, Ogawa Jun, Ohmukai Ikki, Nagasaki Kiyonori
2. 発表標題 Creating a New Semantic Model for Ancient Greco-Roman Prosopography-Toward a Contextual & Historical Description of the Prosopographical Data-
3. 学会等名 Digital Humanities 2020（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Satoru Nakamura, Kazuhiro Okada, Kiyonori Nagasaki
2. 発表標題 An Attempt of Dissemination of TEI in a TEI-underdeveloped country: Activities of the SIG EAJ
3. 学会等名 The 19th annual Conference and Members Meeting of the Text Encoding Initiative Consortium（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiro Okada, Satoru Nakamura, Kiyonori Nagasaki
2. 発表標題 An Encoding Strategic Proposal of “Ruby” Texts: Examples from Japanese Texts
3. 学会等名 The 19th annual Conference and Members Meeting of the Text Encoding Initiative Consortium（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoru Nakamura
2. 発表標題 Approach to develop Digital Collection for Small Organization considering Sustainability and Reusability with IIF and Static File
3. 学会等名 The 9th International Conference of Japanese Association for Digital Humanities 76 - 78 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoru Nakamura
2. 発表標題 Development of Content Retrieval System of Scrapbook "Kunshujo" using IIF and Deep Learning
3. 学会等名 2019 IIF Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NAKAMURA Satoru, NAGASAKI Kiyonori
2. 発表標題 IIF Discovery in Japan
3. 学会等名 2019 IIF Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 徳永洋介、中村正人、小島浩之、小林晃、高橋亨	4. 発行年 2024年
2. 出版社 科学研究費助成事業成果報告書	5. 総ページ数 194
3. 書名 『慶元条法事類』刑獄門訳注稿	

1. 著者名 徳永洋介	4. 発行年 2024年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 30
3. 書名 訳註『名公書判清明集』懲悪門（「南宋時代の法と刑罰 『清明集』を読むために」の箇所）	

1. 著者名 高橋亨 [ほか]	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 5
3. 書名 書物のなかの近世国家 東アジア「一統志」の時代（「明代景泰 天順期の政局と一統志」の箇所）	

1. 著者名 吉見俊哉、森本祥子、岡本拓司、加藤詔士、苅部直、佐藤健二、武田晴人、永井良三、中村覚、橋本毅彦、藤森照信、藤原毅夫、大和裕幸、吉沢誠一郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 360
3. 書名 東大という思想：群像としての近代知	

1. 著者名 中村覚、井上透	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 デジタルアーカイブ・ベーシックス 3：自然史・理工系研究データの活用	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高橋 亨 (Takahashi Toru) (20712219)	東北大学・文学研究科・専門研究員 (11301)	
研究分担者	中村 正人 (Nakamura Masato) (60237427)	金沢大学・法学系・教授 (13301)	
研究分担者	中村 寛 (Nakamura Satoru) (80802743)	東京大学・情報基盤センター・助教 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関